

松任谷正隆の

イ業のひとりごと

01

VOL.01 イントロダクション

僕が生まれたのは杉並区高井戸。3の664という住所まで覚えている。

その後、目の前の道路が舗装され、環状8号線という名前が付いたころにはたぶん高井戸東、という地名になっていたと思う。

僕の生まれば荻窪にある衛生病院だそうだ。もちろん生まれた頃のことなんか覚えていない。

ごく希に、生まれた頃のことを覚えているという人もいるらしいが、それってどういう気分なのだろう。ま、うらやましいとまでは思わないが。

僕の記憶を限界まで辿っていくと、どうやら両親の他に、祖父、2人の叔父が同居していたようである。

記憶が鮮明になるころには、この2人の叔父は結婚をし、それぞれ祖父から家を与えられて別居をしていた。

僕が幼稚園に入る頃にはもういなかつたのではないか。

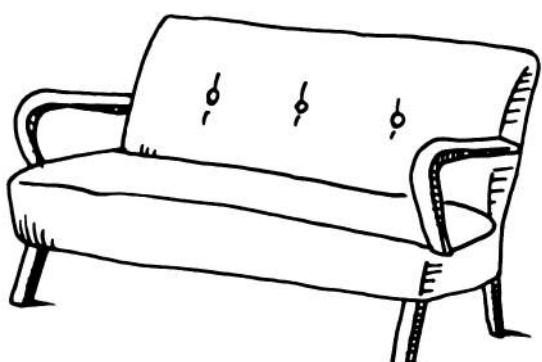
それにしても弟が生まれるまで6人。いったいどういう間取りの家で暮らしていたのだろう。

覚えているのは玄関を入ってすぐ右のドアを開けて入る応接間だ。

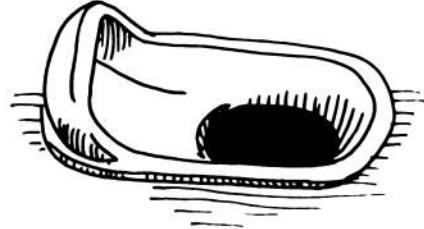
そのうち話すが、この部屋にはいろいろな想い出がある。一応当時はモダンな部類に属したのだろうが、6畳だったか8畳だったか、いわゆる応接セットが置かれており、幼稚園に入るころにはピアノも置かれた。応接セットは、僕の記憶が確かなら、草色のモケット張りで、手すりは楕円のカーブを描く木製。

いやはや、今見たらかなりみすばらしい代物だろう。

でも、子供の体重ではソファの上で飛んで遊ぶのがちょうどいい塩梅だったのだ。



玄関を入って左に行くと左側の庭に面して廊下が続いており、右側には4畳半のこたつの切り込みのある居間、そして8畳くらいの寝室、と続いた。その奥は怖い怖いトイレ、である。
もちろん水洗などなく、ボッチャントトイレ。夜行くのがどれほど苦痛だったか。



はて、祖父や叔父達はどこで寝ていたのだろう、と考えると、
そういえば居間の奥に部屋があったことを思いだした。
やはり6畳間くらいだろうか。ここに寝ていたに違いない。
さらに8畳の寝室の奥にも部屋があったから、祖父はここだったのだろう。
でも、僕が小学校に入るころには増築をし、トイレのさらに奥に
「離れ」なるものが出来、祖父はそこの住人となった。おじいちゃんは臭いから、と僕は近寄らなかったけれど。



弟が生まれたときのことはぼやっと覚えている。

ジェラシーと云う感覚はこのときに芽生えたのではないだろうか。
ある日、弟が産湯を使うというので、お手伝いさん達が木のたらいに
湯を沸かして廊下の真ん中に置いた。弟よりも自分が先に浸かりたくて、
僕は勢いよく飛び込んだ途端、周り中が大騒ぎ。なんと湯は熱湯。
僕の足は火傷でする割けになり、誰かが大きな声で叫んでいた。
「オリーブ油持って来い！！」
だから僕は大人になるまで、オリーブ油が食べられるものである、
ということを知らなかったのだ。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。